グレアム・グリーン全集—11

# 第三の男
# 落ちた偶像
# 負けた者がみな貰う

小津次郎
青木雄造
丸谷才一
訳

アム・グリーン全集

11

# 第三の男
# 落ちた偶像
# 負けた者がみな貰う

小津次郎
青木雄造
丸谷才一
訳

早川書房

グレアム・グリーン全集 11 〈検印廃止〉

第三の男／落ちた偶像／負けた者がみな貰う

著　者　グレアム・グリーン
訳　者　小津次郎／青木雄造／丸谷才一
発行者　早川　清
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号　一〇一
電話番号　東京（〇三）二五四－一五五一（代）
振替番号　東京・六－四七七九九

印　刷　中央精版印刷株式会社
製　本　中央精版印刷株式会社
発行日　昭和五十七年三月三十一日
三版発行
定　価　一四〇〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします

第三の男

落ちた偶像

負けた者がみな貰う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 目次

第三の男……小津次郎訳 7
落ちた偶像……青木雄造訳 111
負けた者がみな貰う……丸谷才一訳 149
あとがき…… 237

キャロル・リードに

尊敬と愛情と、そして、「マキシム」や「カザノヴァ」や「オリエンタル」で過ごした数々のウィーンの早朝の思い出とをこめて。

# 第三の男

小津次郎訳

THE THIRD MAN

by

*GRAHAM GREENE*

Copyright © 1950 by

GRAHAM GREENE

Translated by

*JIRO OZU*

Published 1979 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement

with LAURENCE POLLINGER LIMITED

through TUTTLE-MORI AGENCY INC., TOKYO.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 序文

『第三の男』は読んでもらうためにではなく、見てもらうために書いたものだ。多くの恋愛事件のように、晩餐の席で始まり、いろんな個所で頭痛を引き起していく、ウィーン、ヴェニス、ラヴェロ、ロンドン、サンタ・モニカ。

たいていの小説家は、自分の頭の中に、あるいはノートブックに、陽の目を見ることのない物語の最初のアイディアをためこんでいるのだと思う。時とすると、何年かたってから、それを引っくりかえして、昔はこれでよかったろうが、今では駄目だ、と残念がるのである。ずっと以前に、封筒の折返しに冒頭の一節を書いたことがあった、「一週間前に、私はハリーに最後の別れを告げた。それは彼の棺が凍った二月の地中に納められた時だった。だから、彼がストランドの人混みの中を、知らぬ顔をして通り過ぎていくのを見て、私は信じられなかった」私は、私の主人公と同様に、ハリーを追及していなかった。だから、アレキサンダー・コルダ卿から、キャロル・リードのためにシナリオ――我々の『落ちた偶像』に続くものだ――を書いてくれと頼まれた時、私の提供し得るものは、この一節だけだった。コルダは四大国の占領下にあるウィーンの映画を求めていたが、私がハリー・ライムの跡を追いかけることを許してくれた。

まず物語を書いてからでないと、シナリオを書くことは私にはほとんど不可能だ。映画でさえも、筋立

よりは、性格描写のある種の手法や、気分や雰囲気に依存している。そういうものを、シナリオの無味乾燥な速記の中で、最初に捕えるということは、私にはほとんど不可能のように思われる。一つの効果を別の形式で再現することは可能であるが、シナリオ形式で最初の創造はできない。描くのに必要であるだけでなく、それ以上の素材の意識を持たねばならない。だから『第三の男』は、出版を意図したものではないが、一つの取扱いから他の取扱いへと、明らかに無限の変形をとげるに先立って、物語として出発しなければならなかった。

こういう取扱いについて、キャロル・リードと私とは緊密に協力した。一日に何フィートも絨緞の上を歩いて、互に場面を演じて見せた。我々の相談には第三者が加わったことはなかった。二人の間の激しい論争に大きな価値があるのだ。もちろん、小説家にとっては、自分の小説が、特定の主題に関してなし得る最上のものである。映画や劇に移すために必要な変更の多くは、小説家として遺憾に感じざるをえないことだ。しかし、『第三の男』はもともと映画の素材として企図されたものだ。読者は物語と映画との間に多くの差異を認められるだろうが、そうした変更が、いやがる著者に強制されたものだ、と考えないでいただきたい。おそらくは、著者自身が示唆したものであったろう。事実、この映画は物語よりも良くなっている。それは、この場合、映画は物語の決定版であるからだ。

こうした変更のあるものは、明らかに皮相的な理由によっている。イギリス人ではなくアメリカのスターを選んだ結果、いくつかの変更を余儀なくされた。たとえば、ジョセフ・コットン氏は、きわめて当然な理由によって、ロロという名前に反対した。彼の名前は風変りでなければならない。それで、ホリーという名前を思いついたが、それは、あの風変りな人物、アメリカ詩人のトマス・ホリー・チヴァーズを思いだしたからである。それにアメリカ人ならば、E・M・フォスター氏の温厚な性格を、その文学的特質としてある程度持っている偉大な英国作家デクスターと間違えられることもあるまい。いささか複雑なシ

チュエーションのために、長々と説明しなければならず、ただでさえ長すぎる映画をいっそう長くしてしまう、というキャロル・リードの正当な反対がなかったとしても、人物の混同は起らなかったはずである。もう一つの小さな点は、オーソン・ウエルズ氏の契約によって、アメリカ人の悪党が一人できたから（ついでながら、スイスの鳩時計に関する、好評を博した台詞は、ウエルズ氏自身がシナリオに加えたものである）、アメリカの世論を考慮して、クーラーをルーマニア人に変えた。

キャロル・リードと私との間に生じた、ごく少数の重要な論点の一つは、結末に関するものだったが、結果は彼のみごとな勝利であった。私は、この種の娯楽物には不幸な結末は重すぎる、と考えていた。リードとしては、私の結末は――一語も台詞がないから、漠然とはしているが――ハリーの死を目撃したばかりの観客には、不快を覚えさせるほど皮肉に映るだろう、と感じていた。私は正直に告白するが、彼の説には半信半疑だった。女が墓場から歩いて行く長丁場を、観客はじっと坐ったままで見ているだろうか、映画を見終ってから、これもやっぱり私の結末と同じように紋切型で、いや、それ以上に長ったらしい、という印象を受けるのではないか、と私は思っていた。私はリードの巧妙な演出を十分考慮に入れていなかったし、この段階では、リードがツィター奏者カラス氏という、みごとな掘出し物をしようとは、二人とも予想すべくもなかった。

ソ連がアンナを誘拐する挿話（ウィーンでは十二分に可能性のある事件だが）は、かなり後の段階で削除された。物語の中に十分に結びつけられていないし、映画に政治的宣伝臭を帯びさせるおそれがあった。我々は民衆の政治的感情を動かそうというつもりはなかった。我々は民衆を娯しませ、少しおどかし、笑わせよう、としたのだ。

事実、現実はお伽話の背景たるにすぎない。しかしながら、闇ペニシリンの物語は事実にもとづいている。実際の闇商人の多くは、ジョセフ・ハービンよりも無邪気だったから、もっと悲惨なのである。先日

ロンドンで、ある医者が二人の友人と連れだって、この映画を見た。ところが、驚いたことには、彼は娯しんだのに、二人はしょんぼりして、憂鬱な顔をしている。二人の話によると、戦争の終り頃、英空軍に加わって、ウィーンで自分たちもペニシリンを売った、というのである。彼等の行為によって起りうる結果を、思ってみたこともなかったのである。

# 1

いつ何事が起るか、わかったものではない。私がロロ・マーティンズに最初会った時に、私は保安警察簿に彼のことをこんなふうに書いておいた、「通常の情況下にあっては陽気な馬鹿者。過飲のためつまらぬトラブルを起す可能性あり。女が通れば、眼を上げて批評を下すが、実は女に煩わされたくないらしい。まだ大人になりきっていない、それがためにライムに対する特殊な尊敬を抱くようになった」と。私が、「通常の情況下にあっては」と書いたのは、彼に初めて会ったのがハリー・ライムの葬儀であったからだ。二月のことで、ウィーン中央墓地の凍てついた地面を掘るのには、電気ドリルを使わねばならなかった。自然さえもライムを拒否している形だったが、やっと彼を墓穴に納めて、上から煉瓦のようにコチコチになった土をかぶせた。彼は埋葬され、ロロ・マーティンズは足早に立ち去ったが、そのヒョロヒョロした足は今にもかけだしそうだった。彼の三十五歳の頬を、少年の涙が濡らしていた。ロロ・マーティンズは友情というものを信じていた。だから、その後に起ったことが、あなた方や私ならば何でもないことに思ったろうに、彼にとっては痛ましいショックになったのだ（あなた方ならば、それを幻想だと思ってしまうだろうし、私ならば――たとえ間違っていたとしても――合理的な解釈を思いついただろう）。もしあの時、彼が私に話してくれさえしたら、大して面倒なことも起らずにすんだことだったろう。

この奇妙な、むしろ悲しむべき物語を理解していただくためには、背景についていくらかでも知識を持っていただかねばならない。ウィーンの町は戦争で破壊され、四大国、すなわちソ連、イギリス、アメリカ、フランスに分割され、境界にはただ掲示板が立っているだけという惨めさ、市の中心部といえば、重厚な官庁や威風堂々たる彫像の立ち並ぶリング街にとり囲まれたインネル・シュタットは四大国の共同管理下にあった。かつては流行の中心であったこのインネル・シュタットでは、四大国が一カ月交替で、いわ

ゆる〝議長席〟について、治安の責に任ずることになっていた。夜なぞうっかりナイト・クラブでオーストリア・シリングを使おうものなら、まず間違いなく活動中の連合国警察に出くわすだろう。これは各国から一人ずつ出ている四人の憲兵で、うまく気心が通じているとは義理にも言えないが、敵の国語をしゃべって話が通じていることは事実だった。私は両次大戦間のウィーンを知らなかったし、シュトラウスの音楽や、あやしげな魅力に満ちた昔のウィーンを憶えているほどの年配ではない。私にとってウィーンは、みすぼらしい廃墟の町であり、しかもその二月には、廃墟が雪と氷の氷河になってしまったのだった。ドナウ河は灰色の、どんよりした濁流で、ソ連領の第二地区を貫通して遥か遠く流れていた。この地区では、プラーテル（ウィーンの歓楽街）は破壊され、荒涼として、雑草の生えるにまかされている。ただ〈観覧車〉だけが、メリーゴーラウンドの土台の上を、うち棄てられた石臼のようにゆっくり廻転している。粉砕されたタンクのさびた鉄屑を誰もかたづけようとはしない。雪の薄いところには、霜にやられた雑草がのぞいていた。昔のウィーンを描きだすほどの想像力を私は持っていない。だから、ザッヘル・ホテルは英国軍将校用の短期滞在のホテルとしか描けないし、ケルントナー街は、高級ショッピング・センターではなくて、その大部分がやっと眼の高さの一階までしか修理の届いていない街なのである。ソ連兵が毛皮の帽子をかぶって、ライフル銃を肩にして歩いている。アメリカ軍の案内所の周囲には、数人の売笑婦がたむろしているし、〈オールド・ウィーン〉の窓には、オーバーを着たままの客が代用コーヒーをすっていた。夜になったら、インネル・シュタットか三大国の管理地区にいたほうがいい。しかしそれでも誘拐事件は起る――時にはずいぶん馬鹿げた誘拐もあるもので――パスポートを持たないウクライナの娘、もう役にも立たなくなった老人、時にはもちろん、技術者や反逆者が誘拐される。ロロ・マーティンズが昨年二月七日にウィーンへやってきた時は、ざっとこんな状態であった。私は自分の調査簿と、マーティンズが話してくれたことを材料にして、できるだけ正確に事件を再構成してみた。私としてはできうる限り正確を期したつもりだ――マーティンズの記憶に絶対の信頼をおくわけにはいかないが、私としては会話の一行たりともでっちあげたことはなかった。もっとも、女のことを別とすれば、醜悪な物語だ。英国文化交流協会の講師をつ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.